

斉藤 秀俊（長岡技術科学大学）

### 1. はじめに

令和6年7月に高知市立南海中学校プールで授業中の小4児童が溺れた。この事案については、昨年度中に高知市教育委員会が招集した第三者委員会にて事実関係が検証された。その結果、様々な要因が指摘され、特に「小4児童がなぜ死亡に至ったのか」という極めて重要な議論がなされている。

水泳授業では、溺れないこと、万が一の溺水を早期に発見し、死に至らせないことを考えて、前者においては児童の身長に合わせた水深の選択、バディーシステムの徹底、後者においては監視の徹底が対策として従来から行われてきた。プール内での溺水事故を早い段階で検知するには、水面における監視の役割と水中における監視の役割を明確にする必要がある。

### 2. 解析

水面監視におけるコツは目で見て、耳で聴くことである。特に音は重要で、プールにおいてはプールサイドからの深さを確認しない走り飛び込みが重大な事故を招くことから、プールサイドを走る足音、飛び込む時の水音に注意を払うことになる。なぜかという、水面から見ただけでは、判断できない危険が潜んでいるからである。

例えば図1を解析しよう。プールサイドから幼児がプールに落ちた想定の写真である。

上の図（水面像）では水面の子どもの様子がよく見えるのに対して、下の図（水中像）では人形がよく見える。すなわち、水面からの監視では水の屈折のために水面が反射で光り、水中の様子はつぶれてしまい物体が認識できなくなる。これらは、水面監視の限界を示している。

### 3. 水中監視

高知市のような不幸な事故を減らすためには、最後の砦として水中監視を積極的に導入する。例えば、指導者がゴーグルをつけて数分おきに水中に潜り、プール内のすべてを見渡せばよい。バディーシステムでは、お互いのチェックだけでなく水中に潜って周辺の状況を確認する。こういったことを実行しづらい開放プールや練習を主とするプールの場合に開放プールや練習を主とするプールの場合に水中監視ロボットを投入する。

水難学会では「水中ヨシ」の掛け声で、これらを推進していくべきである。



図1 水面像と水中像の比

水中に潜らないと、沈んだ人形を見つけられない